KCE

Kawaguchi Chamber Ensemble

川口室内合奏団

第５回演奏会

2021 年
4 月 17 日（土）
13:30 開場
14:00 開演

リリア
音楽ホール

ご挨拶

団長　山口尊実

本日は、川口室内合奏団第５回演奏会にご来場下さいまして、まことにありがとうございます。おかげさまで、５回めの演奏会を開催することができました。重ねて御礼申し上げます。今回は、「５」にちなんだ曲を中心に構成しようと思ったのですが、だんだん難しくなってきました。（笑）

前半は、いつものようにバロックの世界をお楽しみください。ヴァイオリン・ソロでバッハの世界をお楽しみください。次に、ヴィヴァルディの『四季』から『春』です。弦楽アンサンブルをお楽しみください。そして、オーボエは今回 2 本の協奏曲です。オーボエ二本の響きをお楽しみください。

後半は、ハイドンの『哲学者』で幕開けです。イングリッシュホルン（コールアングレ）二本という珍しい編成の曲です。そして、「5」に絡めて、25 番。ともに初期の曲です。詳しくは解説をお読みください。後半最後のモーツァルト交響曲 K.V.214（45b）変ロ長調は、「55 番」とも呼ばれています。5 が「2 つ」ということで、お後がよろしいようで。。。

Program

J. S. Bach　無伴奏ヴァイオリンソナタ第１番より
　　無伴奏ヴァイオリンパルティータ第３番より
A. Vivaldi　協奏曲第１番ホ長調 RV269 『春』
T. Albinoni　２本のオーボエのための協奏曲 Op.9-3

＜休憩＞

F. J. Haydn　交響曲　第 22 番 変ホ長調
F. J. Haydn　交響曲　第 25 番 ハ長調
W. A. Mozart 交響曲変ロ長調 K.V.214（45b）（55 番）

Johann Sebastian Bach

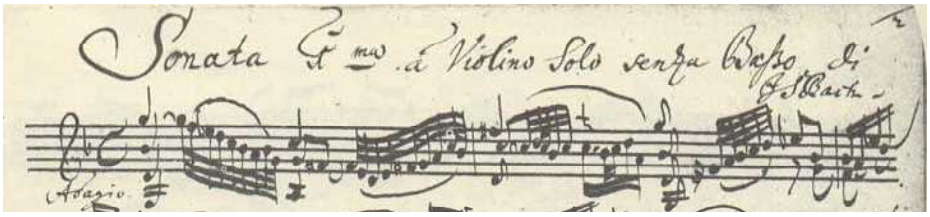
・アイゼナハ時代（1685-95）大音楽家ファミリーの末子として生まれた。
・オールドルフ時代（1695-1700）両親が没し、長兄に引き取られ、オールドルフへ。
・リューネブルク時代（1700-03）北ドイツリューネブルクで教会付属学校給費生に。
・アルンシュタット時代（1703-07）ヴァイマル宮廷楽師兼従僕、新教会オルガニストに。
・ミュールハウゼン時代（1707-08）マリア・バルバラと結婚、７人の子供をもうけた。
・ヴァイマル時代（1708-17）現存するオルガン曲の大半を作曲。イタリアの影響を受けた。
・ケーテン時代（1717-23）『ブランデンブルク』『無伴奏ヴァイオリン』等室内楽を作曲。最初の妻と死別して 1721 年に再婚。後にモーツァルトに大きな影響をあたえた末子ヨーハン・クリスティアンを含む 13 人の子どもが生まれる。
・ライプツィヒ時代（1723-50）ライプツィヒでトーマス教会カントルに就任。『マタイ』『ヨハネ』などを作曲。『ロ短調ミサ曲』を完成後、視力を失い、『フーガの技法』未完のまま 1750 年 7 月 28 日他界。65 歳。

無伴奏ヴァイオリンソナタ第１番 g-moll　BWV1001 より

1720 年、バッハは 35 歳でケーテン宮廷楽長の職に就いた。無伴奏ヴァイオリンソナタとパルティータは、バッハが音楽好きの君主レオポルドに仕え多くの楽曲を作曲していた時の作品である。

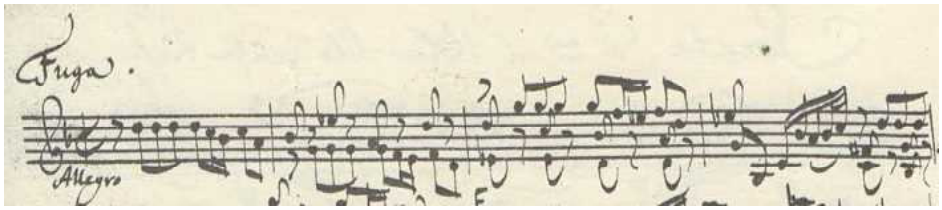
無伴奏ヴァイオリンソナタは３曲あり、すべて教会ソナタの形式で、緩徐楽章と速いテンポの楽章が交互に並んでおり、２曲目にフーガが置かれている。

Adagio　4/4 拍子



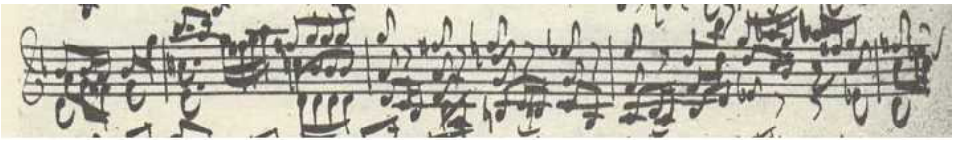
教会が似合うような厳かな雰囲気。４重音ではじまり、装飾的なパッセージが特徴。今回はあまり荘重にならないよう装飾パッセージが優雅に自由に流れていくように演奏します。

Fuga　Allegro　2/2 拍子

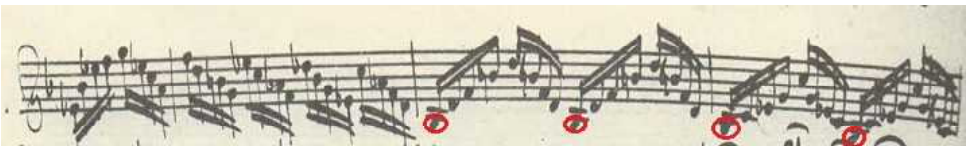


旋律（主題）がいろいろな声部に現れ、重なっていく。最初に同じ長さの同じ音が４つ並んでいるのが特徴。

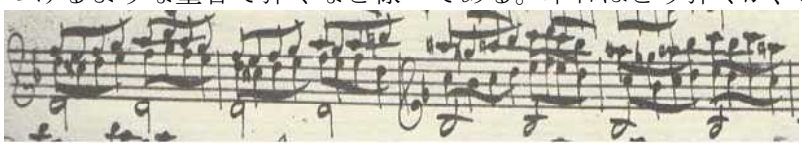
重音で下の声部に旋律が出た時にその旋律を際立たせる為に上から弾く方法があるが、今は下から弾くのが主流である。



フーガの部分とは異なり解放されたような単旋律の自由な雰囲気になるところがあるが、その中にもオルゲルプンクトが隠れていたりする。



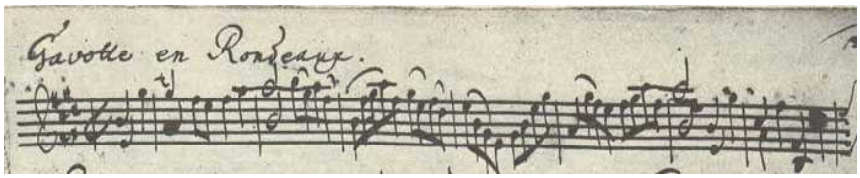
35 小節目からの 3 重音の弾き方は、演奏者によりいろいろな弾き方があり、アルペジオで弾くか、常に 2 音づつ重ねていく重音アルペジオで弾くか、なるべく譜面の通りに近づけるような重音で弾くなど様々である。本日はどう弾くか、お楽しみに！



無伴奏パルティータ第３番　E-dur　BWV1006 より

パルティータは舞曲の集まりでできている組曲である。本日はその中からガヴォットを演奏する。

Gavotte en Rondeau　2/2 拍子



ガヴォットは 2 拍子の舞曲なのだが、この曲は Gavotte en Rondeau とあるようにロンド形式になっている。4 つのそれぞれ性格の違う部分を挟みながら、テーマが何度も繰り返される。

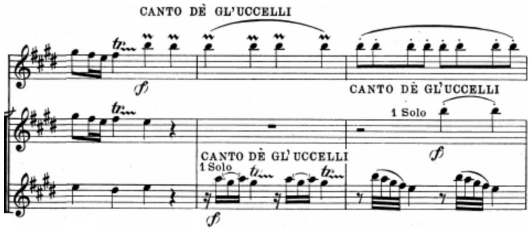
A.Vivaldi『和声と創意への試み』より
協奏曲第１番ホ長調 RV269『春』

Antonio Lucio Vivaldi（アントニオ・ルーチョ・ヴィヴァルディ）は 1678 年 3 月 4 日ヴェネツィア生まれ。ヴァイオリニスト、音楽教師、司祭、興行師、劇場支配人であった。父親からヴァイオリンを学び、10 歳より教会附属の神学校に入るとともに見習いヴァイオリニストになり、25 歳で司祭に叙階された。1741 年 7 月 28 日ウィーンにて没。

一般に、「四季」で有名なこの一連の曲は、「春・夏・秋・冬」でワンセットのイメージがあるが、実際には、『和声と創意への試み』と表記される全 12 曲で構成されている。その中の、第 1 曲から第 4 曲が「四季」（伊：Le quattro stagioni、英：The Four Seasons）である。各曲はそれぞれ３つの楽章から成っており、各楽章にはソネット（詩）が付いている。ソネットの作者は不明であるが、ヴィヴァルディ自身の作という説もある。

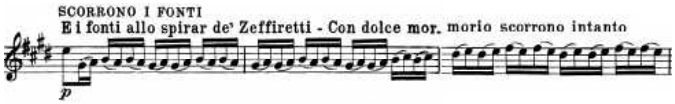
第１楽章

Giunt' è la Primavera
Spring has come
春が来た



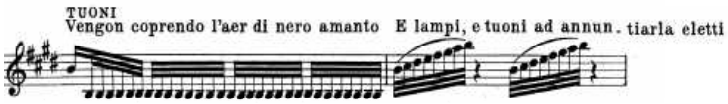
CANTO DE GL'UCCELLI
SONG OF THE BIRDS
鳥の歌（さえずり）

e festosetti La Salutan gli Augei con lieto canto
and merrily greetings with happy song
そして、幸福に満ちた歌と陽気な挨拶



SCOLNO I FONTI
flowing fountains
泉の流れ

E i fonti allo Spirar de' Zeffiretti - Con dolce mormorio Scorrono intanto
and, meanwhile, at the breath of the Zephyrs, the streams flow with a sweet murmur:
そして、しばしの間、西風（の息）の流れは、甘い呟きとともに流れる。



TUONI
THUNDER
雷

Vengon' coprendo l'aer di nero amanto
They come covering the air with black gloom
それは黒い闇とともに空気を覆い

E Lampi, e tuoni ad annuntiarla eletti
And lightning, and thunder to announce it elected
そして稲光。雷鳴りが轟く（発生を知らせる）

CANTO DE GL'UCCELLI
SONG OF THE BIRDS
鳥の歌

Indi tacendo questi, gli Augelletti
Then silenced these, the Augellets
そして、静かになった。
（Augletts がそれらを静かにした。）

Tornan di nuovo al lor canoro incanto
Return again to their singing enchantment
再び喜びの歌へと戻る。

２楽章

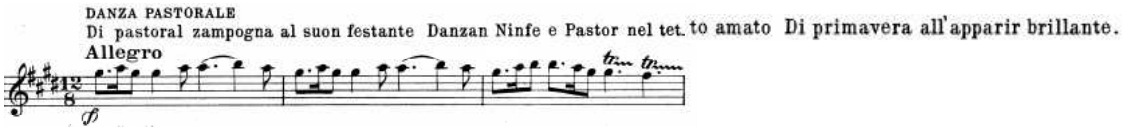
E quindi sul fiorito ameno prato
Al caro mormorio di fronde e piante
Dorme 'l Caprar col fido can' à lato.

And then on the flowery pleasant meadow
To the dear murmur of foliage and plants
The goat-herd sleeps with his faithful dog at his side.
そして、花の咲く明るい草原
葉と草のやさしいつぶやき
羊飼いは眠る（略）

※ヴィオラが「センプレ・フォルテ」（ずっと強く）でシンコペ風の音型を続けている。

訳出で省略したところだが、先入観なしに聞くと何に聞こえますか？（みなさん既にご存じか……。）

第 3 楽章 Allegro



Di pastoral zampogna al suon festante
Danzan Ninfe e Pastor nel tetto amato
Di primavera all'apparir brillante.

Of pastoral bagpipes to the festive sound
Nymphs and shepherds dance on the beloved roof
Of spring at the bright appearance.
牧歌的バグパイプの陽気な（お祭りの）音の
妖精と羊飼いが可愛い屋根の上で踊る
明るい春の訪れ

（DL 翻訳を参考にしました）

T. Albinoni　２本のオーボエのための協奏曲 へ長調

Concerto for 2 Oboes in F major, Op.9 No.3

アルビノーニは 1671 年 6 月 8 日ヴェネツィアに生まれ、1751 年 1 月 17 日に没した。J.S.Bach が 1685 年 3 月 31 日～ 1750 年 7 月 28 日なので、ほぼ同時代を生きていた。バッハもアルビノーニの音楽をよく知っており、３曲のフーガ（BWV946, 950, 951/951a）でアルビノーニの主題を使用しているほか、生徒の和声の練習にアルビノーニの通奏低音の進行をよく利用した。アルビノーニは生前 52 ほどのオペラを作曲していたが、大半が紛失しており残念な限りである。

この２本のオーボエのための協奏曲は、1722 年に発表された「12 曲の五声の協奏曲集」（作品 9、伊：12 Concerti a cinque）の中の 1 曲である。その 12 曲の内訳は、ヴァイオリン協奏曲が 1 番、4 番、7 番、10 番の 4 曲、オーボエ協奏曲が 2 番、5 番、8 番、11 番、そして、2 本のオーボエのための協奏曲が 3 番、6 番、9 番、12 番となっている。[*1]

第 1 楽章 Allegro　4/4 拍子

お約束の？リトルネッロ形式で、弦楽合奏で始まる。
その後オーボエが入ってくるのだが、1 回目と 2 回目で次のように違う。

ぼーっと聞いていると分からないのだが、楽譜を見ると 2 拍ずれているのが分かる。その後、C-dur（ハ長調）に転調し、いろいろ転調し、再現し、終了する。

第 2 楽章 Adagio　8/12 拍子

平行調のニ短調となり、ヴァイオリンが先にメロディーを奏でる。

2/12 拍遅れてオーボエが副旋律を奏でる。その後、掛け合いや非和声音である係留などでそこはかとなく美しく進んでいく。

全曲を通して基本的にビブラートを使用していないのですが、この２楽章では、装飾音符をなくし、シンプルな響きを追求しました。

第 3 楽章 Allegro 3/8 拍子

ヘ長調、リトルネッロに戻り、アウフタクトから始まる軽快な曲。

オーボエが入りさらに軽快に進んでいく。

1 楽章同様、中間で C-dur（ハ長調）になり、転調していって、再現し、終了する。

*1 アルビノーニの出版作品は以下のようになっている。

作品 1　12 のトリオソナタ 1694 年作曲

作品 2　6 つのシンフォニアと 6 つの五声の協奏曲　1700 年作曲

作品 3　12 の三声の室内舞曲　1701 年作曲

作品 4　ヴァイオリンと通奏低音のための 6 つの教会ソナタ　1704 年作曲（1708 年出版）

作品 5　ヴァイオリンと通奏低音のための 12 の協奏曲　1707 年作曲

作品 6　12 のヴァイオリンソナタ　1711 年作曲

作品 7　12 の協奏曲集（オーボエ、2 オーボエ、弦楽合奏）　1716 年作曲

作品 8　6 つのソナタと 6 つの三声の舞曲 1721 年作曲

作品 9　12 の協奏曲集（オーボエ、2 オーボエ、ヴァイオリン）　1722 年作曲

作品 10　12 の協奏曲集　1735 年 - 1736 年?作曲

この中の「作品 9」の構成は以下のようになっている。

Op. 9: 12 Concerti a cinque

（for solo violin, 1 or 2 oboes, 2 violins, viola, cello and basso continuo）, Amsterdam 1722

No. 1 in B-flat major（for violin）

No. 2 in D minor（for oboe）

No. 3 in F major（for 2 oboes）

No. 4 in A major（for violin）

No. 5 in C major（for oboe）

No. 6 in G major（for 2 oboes）

No. 7 in D major（for violin）

No. 8 in G minor（for oboe）

No. 9 in C major（for 2 oboes）

No. 10 in F major（for violin）

No. 11 in B-flat major（for oboe）

No. 12 in D major（for 2 oboes）

Franz Joseph Haydn　フランツ・ヨーゼフ・ハイドン

1732 年 3 月 31 日、オーストリア大公国（当時）生まれ。1809 年 5 月 31 日ウィーンにて永眠。ハイドンの交響曲といえば、104 曲というのが長い間の「常識」だったが、1792 年に作曲された協奏交響曲に第 105 番が付けられ、第 106 番二長調、第 107 番変ロ長調（間違って弦楽四重奏に分類されていた）、第 108 番変ロ長調が加えられた。

交響曲の父と言われていることは有名だが、ソナタ形式を確立したことが大きいと私は思っています。現在までに私たちが演奏してきた曲は、ソナタ形式の確立途上で、輪郭はあるものの、自由に気ままに作曲しているように思えます。

交響曲第 22 番　変ホ長調　Hob.I-22

交響曲第 21 番から第 24 番までの 4 曲は自筆楽譜が存在し、1764 年の作曲であることがわかっている。21 番および 22 番は Adagio で始まるが、23 番と 24 番は Allegro で始まる。

3 楽章にメヌエットが来て、終楽章が Allegro または Presto という構成は 4 曲共通である。

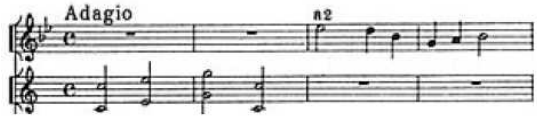
この Es-dur（変ホ長調）の 22 番は、オーボエの代わりにイングリッシュホルン（コールアングレ。以下 EH）が使われているのが特徴で、独特の雰囲気を醸し出している。

「哲学者」という表題はハイドンがつけたわけではないようで、モデナのエステンセ図書館が所蔵する 1790 年ごろの筆写譜にこの名称を記したものがあるという。表題の理由はわからないのだが、曲を聴いてみると納得する曲想のような気がしてしまうのは騙されているのかもしれない。

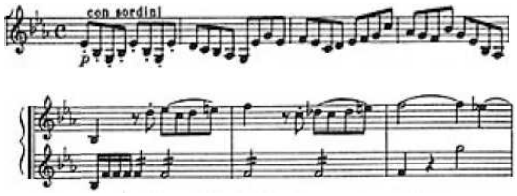
EH は Antonín Dvořák[*2] の交響曲第九番「新世界から」の２楽章で有名だが[*3]、1720 年ごろに発明され、18 世紀後半のウィーンの作曲家によって使われた。オーボエより５度低い楽器で、長さも 1.5 倍で、その牧歌的な音色はみなさんご存じの通りである。

ハイドンが EH を交響曲で使用したのはこの 22 番のみだが、他に 1760 年代のディヴェルティメント、1767 年の『大オルガン・ミサ』などで使用している。

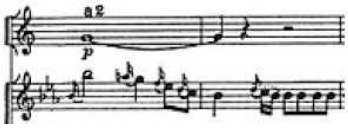
第 1 楽章 Adagio　4⁄4 拍子　ソナタ形式



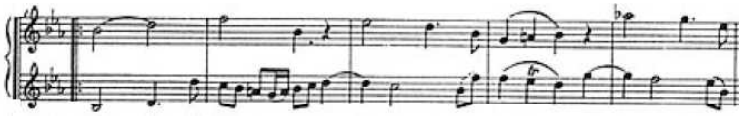
提示部第 1 テーマが Es 管ホルンの「ドーミーソードー」で始まる。[*4] 呼応するのは、F 管の EH。ホルンの調性で読めば、「ファーミドラシドー」。以上を弦楽器（あるいは C 管楽器）で言えば、「ミ♭ーソーシ♭ーミ♭ー」「ラ♭ーソミ♭ドレミ♭ー」となる。[*5]



管楽器のテーマに対し、弦楽器は弱音器をつけ、スタッカートで分散和音を刻む。2ndVn の F の刻みの上で、1stVn が F-dur のメロディを奏で、係留→解決を繰り返す。

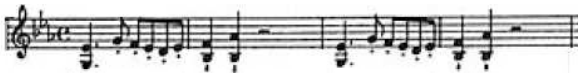


第２テーマは、ホルンの Es 管のソ、実音のシ♭に乗って、vn パートがユニゾンで下降音型を奏でる。よくよくみると、単なる B-dur の下りの音階だ。音階練習は大切です。

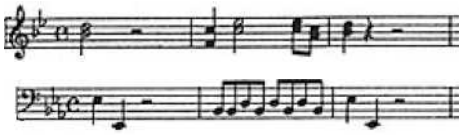


展開部は 1stVn による B-dur のテーマで始まるが、今度は 2ndVn の係留からの解決が美しい。その後、イングリッシュホルン（以下 EH）が転調しながらテーマを奏で、Hr の g-moll となったテーマを経て、再現に。再現部では、お約束どおり、第２テーマが主調の Es-dur になり、静かに終わる。

第 2 楽章 Presto　4⁄4 拍子　ソナタ形式



打って変わって、元気な 2 楽章。Vn による第１テーマで始まり、管楽器が合いの手を入れる。（左の楽譜は EH）

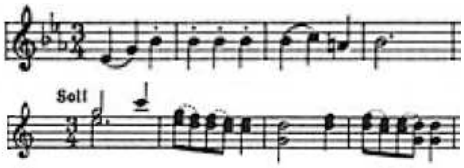


２小節の低弦の動きが、シンプルながらも躍動感を醸し出す。

すぐさま第２テーマとおぼしき Vn の跳躍が聞こえてくる。３回目は 10 度の跳躍だ。その後どうなるのかと思っていると、5 回の跳躍の後、気ままに経過していく。静かになったと思ったら EH によるテーマが顔を出し、提示部は終了する。

展開部は、先ほどの第 2 テーマからスタート。1stVn だけを見ると提示部と区別がつかないが、2nd 以下の弦を見れば（聞けば）分かるように、b-moll（変ロ短調）になっている。2ndEH のレ♭（と 1stEH のシ♭の６度）が聞こえていたら素晴らしい！提示部にもあったシンコペからのフレーズが顔を出し、再現部へ。テーマが戻ってきて安心していると意表を突かれ（ハイドンらしいと言えばハイドンらしい）、コーダへ向かう。ここでは EH は Es-dur でテーマを奏で（提示部では B-dur）、終わる。

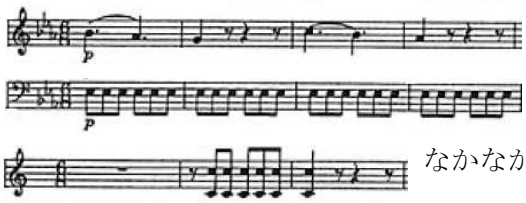
第 3 楽章 Menuetto - Trio　3/4 拍子



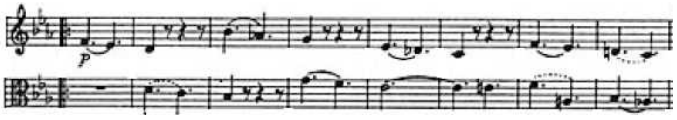
Vn と EH のメロディで始まるシンプルなメヌエットでちょっと落ち着く。

トリオは EH と Hr が活躍（左は Hr 譜）。ごらんのように、かなりの高音域で、なかなか難しい。

第 4 楽章 Finale: Presto　6⁄8 拍子　ソナタ形式

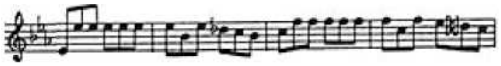


軽快な速いテンポの終楽章。Vn のテーマが低弦の刻みの上に乗り、Hr が「ンタタタタタ」と八分休符つきで合いの手を入れる。これがなかなか難しい。

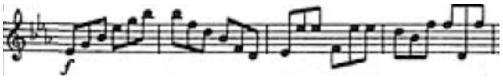


展開部は弦楽器のカノンで静かに始まる。その後ｆ（フォルテ）となり、2nd 以下の弦の刻みと管の和声進行の中で 1stVn が第一テーマの反行型のメロディを奏で、展開していく。

冒頭の静かなメロディが戻ってきて（再現して）ほっとしたのも束の間、提示部とは違う形で進行していく。



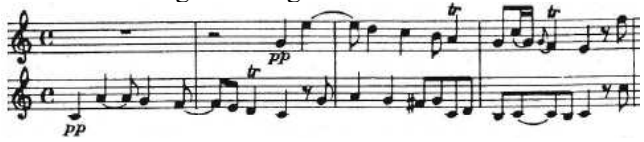
ちなみに、提示部はこうだった。



そして、Es-dur で心地よく終わる。

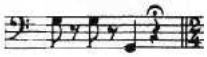
交響曲第 25 番 ハ長調　Hob.I-25

第 1 楽章 Adagio - Allegro molto　4/4 - 2/4 拍子 ソナタ形式



2ndVn で始まるアダージョのメロディは、係留、シンコペ、強弱を経て、弦楽器の ｆ のユニゾンの後、フェルマータで半終止する。

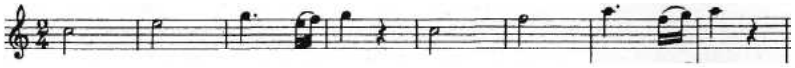
←この楽譜は上段がオーボエ、下段が C 管ホルン。これで属 7 の和音になっている。また、弦楽器群だけでも属 7 の和音を奏でている。



（↑はチェロバス）

その後上昇する音形は下降音形に取って代わり、「ド→ソ→ミ→ド→ソ」で終止する。これがユニゾンの G（ソ）でハ長調 V の主音のみの半終止であり、次の I の和音を予感させ、序奏が終わる。[*6]

提示部



ドーミーソーミファソ、ドーファーラーファッラ、とハ長調の I → IV のメロディ。序奏の終わりから期待を裏切らないメロディである。

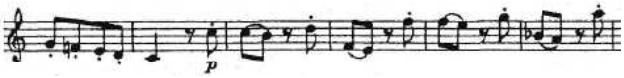
「レファ♯ラ」の和音は、D-dur（ニ長調）の I の和音ではなく、G-dur の V の和音である。ｐになり下降音形の第２テーマが始まるが、あっという間に結尾へ。

展開部

第二テーマの下降音形がｐで現れると、すぐに第１テーマが現れ、展開していく。第２テーマの逆の上昇形が現れ、再現する。

再現部

再現してほっとしたのも束の間（笑）、vn のトリルの音型が多い。

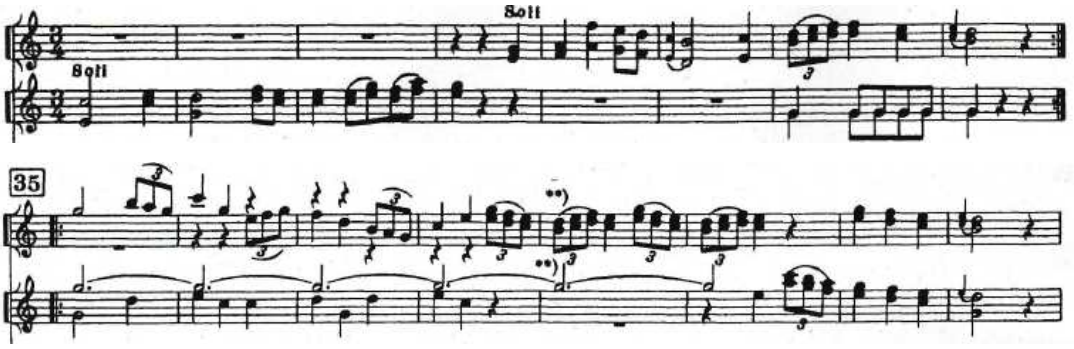


ハ長調に転調し、第２テーマが来るが、ここも形も回数も面白い。

2ndVn のシンコペーションを伴う和声進行ののち、コーダに入り、I → V → I → V → I で終わる。

第 2 楽章 Menuet - Trio 3/4 拍子

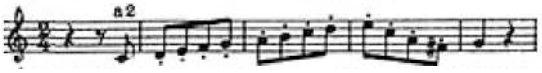
お約束のメヌエット。付点、トリル、三連符などを組み合わせた楽しい音楽である。
譜例はオーボエ。Vn との違いが聞き分けられたら素晴らしい！（すぐ分かると言えば分かる…）
トリオは、弦楽器のピッツィカートの伴奏に乗ってオーボエとホルンがかけあう。



第 3 楽章 Presto 2/4 拍子　ソナタ形式

よくよく考えてみると、「ソーラーシードー」という単純な上昇音型の「シードー」をオクターブ下げただけだ。

（４小節目の付点は、その次の上昇音階のアウフタクト）



スタッカートの歯切れの良い上昇音階が続く。

もう一度、冒頭のテーマが来るかと思いきや、例によって期待を裏切り、３小節目から f になる。Vn によるシンコペの第２テーマと管、低弦の合いの手で軽快に進み、あっという間にコデッタ。

展開部

1stVn で始まるメロディを 2ndVn が 1 小節遅れで追いかけるが、再現部では、低弦が 2 小節遅れで追いかける。そこに気づけばあなたはハイドンファン。

コーダの直前に冒頭が顔を出すのもおちゃめだ。（冒頭との違いが聞き取れたら素敵！）

Wolfgang Amadeus Mozart ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト

1756 年 1 月 27 日ザルツブルク生まれ。３歳からチェンバロを弾き始め、5 歳のときに最初の作曲を行う（アンダンテ ハ長調 K.1a)。交響曲第１番は 1765 年 2 月 21 日初演、８歳の時[*7]。1791 年 12 月 5 日没。35 歳であった。晩年の次の言葉をぜひ紹介したい。

「ヨーロッパ中の宮廷を周遊していた小さな男の子だったころから、特別な才能の持ち主だと、同じことを言われ続けています。……中略……長年にわたって、僕ほど作曲に長い時間と膨大な思考を注いできた人はほかには一人もいません。有名な巨匠の作品はすべて念入りに研究しました。作曲家であるということは精力的な思考と何時間にも及ぶ努力を意味するのです」[*8]

交響曲 変ロ長調 K. Anh. 214（45b）（55 番）

1768 年頃にザルツブルクで作曲された交響曲らしいが、自筆譜も作品に関する資料も存在しないため正確な年代や真偽については不明である。「第 55 番」とされることもある。前回の 45a「Old Lambach」同様あまり演奏されない曲＆「５つながり」で選んでみたが、お聴きになって、ヴォルフガング作と思えるかどうか、思いを馳せてください。

第 1 楽章 Allegro　3/4 拍子　ソナタ形式

冒頭、B-dur(変ロ長調）の I の和音（シ♭・レ・ファ）と思いきや、Vn の重音で B(シ♭)と D（レ）の音が鳴っている。[*9]　４小節後、B-dur の音階を駆け上がる。９小節めに冒頭と同じ和音が響く。再び第１テーマを奏で、F-dur になり第２テーマへと。

お約束通りの F-dur の第２テーマだが、ここでは、低弦のメロディに耳を傾けてほしい。この後この第２テーマが何度か出てくるので、そのたびに低弦に傾注してください。（あえて譜例は省略）

再現部では第２テーマが変ロ長調（B ♭）で始まり、最後に第１テーマがちょろっと顔を出し、元気よく終わる。

第 2 楽章 Andante　2/4 拍子　ソナタ形式

1stVn の先発による第１テーマ。

この第２テーマはハイドン風？

2ndVn、Va のシンコペーションにのって静かに終わる。

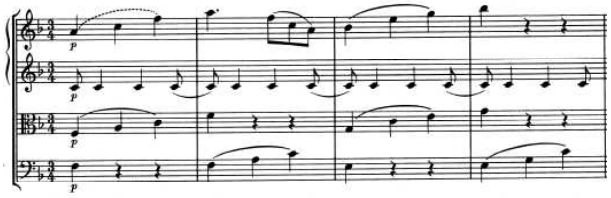
短い展開部を経て、再現し、同じように終了する。

第 3 楽章 Menuetto - Trio　変ロ長調 - ヘ長調　3/4

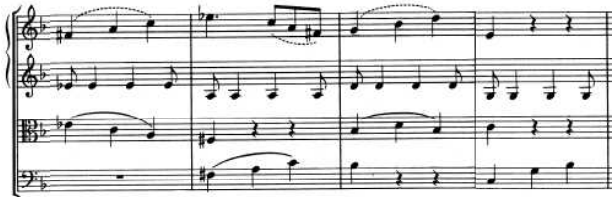
軽快なメヌエット。Vn パートのソリで楽しく歌う。

Vn パートのみで始まる。1stVn のこのメロディの下で、2ndVn の「ため息」が。

Trio

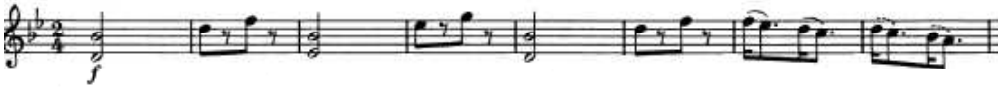


属調（5 度上）に転調した弦楽器のみによるトリオ。2ndVn のシンコペーションに乗ってカノン風に進んでいく。

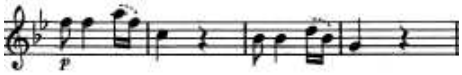


後半の冒頭の 1stVn の「ファ♯ラドミ♭」は、よく見ると（よく見なくても）、減七、ディミニッシュだ。
冒頭のメヌエットに戻って終わる。

第 4 楽章 Allegro　2/4　ソナタ形式

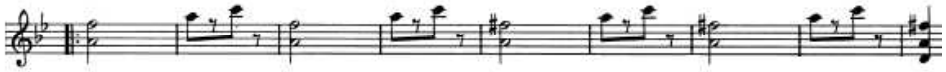


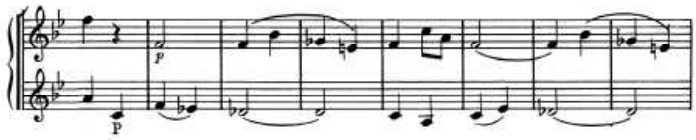
２小節単位の軽快なメロディが、Ⅰ→Ⅳ→Ⅰ→ V_7（属七）の和声（低弦は刻み）に乗って進んでいく。



F-dur の第２主題が p でちょろっと顔を出すが、すぐさま f となり、2ndVn の音階（上昇→下降）を経てコデッタへと進んでいく。

展開部で展開し（当たり前）





ここでやや不思議な進行をし、

F-dur になり、再現へ向かい、提示部同様に終了する。

*2 「ドボルザーク」というよりは「ドヴォジャーク」である。インターネットで発音を聞けるようになったのは素晴らしい。

*3 かつて（今でも？）この交響曲を「新世界」と略してしまいがちだが、「新世界」ではなく「新世界より」、" From the New World"、"Aus der neuen Welt"、"Z nového světa"である。「そんな細かいことを…」と思う人もいるかもしれないが、これは重要で、「『新世界』の曲」ではなく、「新世界」つまりアメリカから故郷を思った曲である。（これはもう常識になっているか？）
「遠き山に日が落ちて～」で有名なフレーズも、実は、日の出のイメージであるという説もある。実際のところはどうなのだろう。。。

*4 Es 管というのは、やや短い管で、ふつうにドを吹くと短三度上のミ♭が出る。

*5 絶対音感のある人はこのほうが分かりやすいのだろう。

*6 序奏と言えば、例えば、ブラームスの交響曲第 1 番の 1 楽章のティンパニの連打とともに始まる序奏が有名と言えば有名だが、一方で、ベートーヴェンの交響曲第 1 番の属 7 の和音から始まる序奏や、同じく第 2 番の序奏では、序奏終了後なだれ込むように Allegro の提示部に入る部分など、枚挙にいとまがない。ベートーヴェンは次の 3 番では、2 度の主和音連打の後に第 1 テーマが始め、第 5 番、第 6 番は序奏なしで第 1 テーマで始まる。（4 番は長い序奏があり、これはこれで趣深い。7 番も。）
これを機にシンフォニーの序奏に興味を持っていただければ嬉しいです。（既知の皆さんにはすみません）

*7 「年齢詐称疑惑」もあるが、幼少であることには変わりはない。（レオポルドの示唆があったという「噂」も…。）

*8 前回と同じ紹介で申し訳ないのだが、モーツアルトに関しては、「天才がすらすらと簡単に作曲した」というイメージが流布している気がして仕方ないので、改めて載せさせていただいた。ご容赦ください。（ドノヴァン・ビクスレー『素顔のモーツァルト』清水玲奈訳、グラフィック社、2005 年）

*9 第 1 転回形で、シ♭がオクターブ上になっているが。（ハ長調であれば、「ドミソ」の「ドミ」が、「ミド↑」）何の先入観もなくこの冒頭の音を聞いたとしたら、どう聞こえるのだろうか。例えば、ベートーヴェンの交響曲第 5 番の冒頭の「ソ→ミ♭」は、変ホ長調で考えれば、移動読みして（ハ長調で考えれば）「ミ→ド」であり、この 1 楽章の冒頭とほぼ同じだ。「ミドミドミソソー」となればハ長調だし、「ミドミドラー」となればイ短調だ。
　しかし、私たちは、「じゃじゃじゃじゃーん」と 5 番の 1 楽章の冒頭を聞くと、ハ短調だと即座に感じてしまう。これは、一度知ってしまっているからなのか、微妙な音程の調整でそう聞こえるのか、指揮者や演奏者の気が伝わってくるのか。。。

Vn solo & コン・ミス　藤本舎里

３歳より才能教育研究会にてヴァイオリンをはじめる。東京藝術大学を経て、同大学院修了。全日本学生音楽コンクール大阪大会小学校の部及び高校の部第２位。五十嵐由起子、澤和樹、景山誠治、故ゲルハルト・ボッセ各氏に師事。川口市芸術奨励賞受賞。アマチュアオーケストラとの協奏曲共演の他、国内オーケストラや室内楽、ソロなど様々な分野で活動。後進の指導にもあたっている。奈良県出身、川口市在住。

オーボエ・指揮　山口尊実

埼玉大学教養学部教養学科卒業。幼少よりピアノを始め、小学生でトランペットを始める。中学の管弦楽部でオーボエに出会い、以後オーボエを続ける。宮本文昭、シェレンベルガー、茂木大輔、ルルー各氏らの演奏会や公開レッスンに足繁く通う傍ら、斎藤享久、渡辺克也、荒絵理子各氏らに師事。楽器：Oboe:LF、English Horn:Bulgheroni
趣味：S660、virago1100、Mono-ski、ScubaDiving（Resuce Diver）、筋トレ、バドミントン etc.

オーボエ　原　愛

中学校の部活でオーボエに一目惚れ。吹奏楽で 15 年、その後オーケストラに転向し、オーボエ一筋〇十年。本業は製薬会社勤務のペーパー薬剤師（希少疾病用医薬品の開発）。使用楽器は Oboe: Marigaux 910（FA）, English Horn: Moning 180D DAC40 周年記念特別モデル（ハイドンの哲学者を吹きたかった..）。趣味：昼寝、読書、勉強、練習。

member

vn　藤本舎里，渡邉昭子 solo，大西由梨 solo，伊藤温子，松尾沙樹，山田友香子
va　高橋良暢　　vc　大和伸明　　cb 森田章
ob　大倉淳，大山明子，原愛　　hr 林義昭，松沢宗一郎，伊藤紋子
cond, ob　山口尊実

◎団員募集しております。詳細はＨＰにて！

第６回演奏会のお知らせ

2022 年 1 月 29 日（土）13:30 開場 14:00 開演　リリア音楽ホール

曲目（予定）

J. S. Bach 無伴奏ヴァイオリンソナタ第 2 番より
A. Vivaldi 「和声と調和の試み」より 第 2 番 in g RV 315「夏」（「四季」より）
T. Albinoni ２本のオーボエのための協奏曲 in C 9-9
F. J. Haydn 交響曲 19 番 in D、交響曲第 26 番 in d「哀歌」
W. A. Mozart 交響曲第 6 番 in F KV43

HP：kce.saitama.jp　　mail：bur@kce.saitama.jp